（十六日夕刊）
磐城新聞
休刊日 大祭第一第三日曜日
定價 壹枚二錢 壹ケ月五十錢 郵稅拾錢
廣告料（雜報欄一行五十錢 場所指定二十錢增）
發行兼編輯印刷人 福島縣平町田町拾六 蓮沼龍輔
發行所 磐城新聞社 電話五六番

復活のキリスト人生

高橋徳太郎

吾人の信仰のグラックの本當に基督を知らぬからである、基督の人格の秘密を解き得る手がかりを確にとらへてゐない時に吾人の信仰は散漫なものとなり、イエスの生前に於てしば〳〵彼に躓きしペテロの如きはサタンに麥の如くふるはれたのである、これは彼等が充分に師の人格に觸する手がかりを得てゐなかつた前に彼等に多くの信仰上の失敗があつたのである彼等にはイエスの生前には人格のつかみどころが見あたらなかつたのである、弟子達の中でもベタニヤのマリアなどはイエスの生前にたいて比較的によく師の人格を直覺的に識つたのである、彼女は他の多くの人よりも師の人格に比較的に深く喰入ることができた、従つて彼女の信仰は其の當時では最もしつかりしたものであつたのである、ペテロなども師の復活に接して始めてその人格に徹底することができたのである『神はこのイエスを甦らせ給へり、われらは其の證人なり』と宣言するに至つて、彼の信仰は磐石の上に立つた、基督の弟子の中で最もよく彼を識つたのはパウロである、彼は生前のイエスは見なかつたのであらう、しかし彼は基督の人格の眞髓に徹することができた、彼は肉にとらはれず靈に於いて基督を識つた、彼は基督を深く識つたと思ふまに、いつしか外に基督に識られてゐるのを發見する、基督を眞によく識るのは基督から識られることである基督から識らるゝことを理解してわれ等の信仰は本當に堅固なるものとなるのである。基督を知つたと思ふだけでは、未だ自己の力で基督に打當つてゐるのである、基督に知られてゐることを意識して始めて吾人が手を放しても基督が吾人をつかんで落とさない事がよくわかるのである吾人は基督に見出だされ識られ愛されてゐるのである事を悟るときには言葉につくされぬ感謝がわいてくるのである、これが宗教生活である。

× ×

基督がわれ等を識るといふ事は一面から見れば、その復活の力によつて、われ等を義とすることである、われ等は基督を信ずることによつて其の義が永遠の力となるのである、われらは自己の魂の正体を熟視したならば絶えていづこにも取るべきところ、義とせらるゝところはない、たゞ恩寵としての義、信仰によれる義復活の基督のみが唯一の私等のたよるべき點であることの一心の信頼によつてキリストの義が我がうちに滿ち溢るゝに至らば人は始めて滿足、感謝、安心の地に達し得るのである、かくして人はキリストの永遠の創造力によつて改造せられ『新に造られた者』となるのである、一体信仰なき人生はあはれなもの、實行の力なきものである、しかし復活の主は無限の力である、躓き倒れんとするわれ等を支る力はいつも活けるキリストである、復活の力を体驗しない人には恐るべきものが世になくなるのである。

明日の吉凶　舊暦四月十七日　新暦五月十七日

▲一白 身飾りを質素にして分限を守れば大吉なり▲二黒 十分と思ひし事にも行難みを生ず失物注意▲三碧 苦しみ多くとも後日のためと思ひて辛抱すべし▲四綠 自分でも思はざりし事に不圖手出し苦しむ日▲五黄 氣を締め油斷なく勵むときは大望も成るべし▲六白 進路を曲げず既定の方向に歩むが案全の日▲七赤 永久に亘る事を始むるには尤もよき日なり▲八白 金錢出づるとも苦にするなかれ後日大に入る種▲九紫 目上に逆らはぬ様にすべし外に存りて失物注意

講談 血で血を洗ふ (36)

高橋掬太郎創作　布施巾八郎揮毫

二説に分かる
留守居の家臣も少くない

けれど智あり勇あり眞に力と頼むことの出來るのは神部清左工門一人であつた。殊に留守居に殘された家臣の多くは昌康や早間重太夫の一味となつてゐる腹の黑い者ばかりであつた。だから神部清左工門が少し位の病氣でも戰場の供をさせたいのは山々であつたが神部を戰場へ連れて行つては昌康や早間重太夫を抑へつける者がない。それでは留守居に何をやりだすか知れないと慧眼の成昌はちやんと見拔いてゐた。そして神部が病中であるのを幸ひとして留守居に殘すことになつた。勿論成昌は神部によく我か意を語つておいたのであつた。また奥方に對しても此の事を含ませておいたのであつた。

それ程に信頼してゐる神部の姿が見えないのであるから奥方の落膽は一方でなかつた。しかしよもや早間重太夫が計つて神部の名を廻状から拔いたとは氣がつかなかつた。

「御一同に揃ひになつたやうでござるからこれから評定を開きまする」

と早間重太夫が口を切つてつづいて今日の評定の理由を述べた。

「本日火急の總登城をお召になつたのは餘の儀ではござらぬが實はお家の興亡に關する重大の事件が起つたのでござる。と申すは主君が御出征のお留守を狙つて織田信長か柴田勝家を大將に約一萬の軍を起して攻め寄せ參つたのでござる。然るに當城は主君はた留守であり至つて兵も手薄く到底織田の大軍を引受けて勝つ見込みがないのでござる。古言にも負けて勝つとやら勝つ見込みのない戰ひをつづけて亡びるか、それともお家の安泰を圖るか二つに一つの途を選ぶ時となつたのでござる方々腹藏なき御意見を述べて頂きたい」

重太夫は自席から進み出てから述べた。

一座はしんと水を打つたやうになつた。誰の面にもいよ〳〵不安の雲が暗くかゝつて容易に口を開く者がなかつた。

「先づ昌康君の御意見は如何のものでございませう」

向かつて問ふた。

「余の意見か余は降服するがよいと存じる」

「して、その御理由は?」

「されば只今も其の方の申すが如く信長の一萬の大軍を引受けては到底勝つ見込みのないことである。勝てぬと知つて戰ひ亡びるを待つは愚の至りである。且つ先祖に對しても申譯がない」

と昌康は第一に降服說を述べた。

それは重太夫と打ち合せてゐたことであつた。

「然らば奥方様の御意見は」

と重太夫が問ふた。

「妾は飽迄も戰ふをよしと信じまする」

奥方の聲は凛然とひびいた。

「その御理由は?」

「それは云ふ迄もありませぬ。代々武門の譽れ高き當城が信長の一萬の大軍に恐れて戰はずに降服したと言はれては末代までお家の恥でありませう。それこそ御先祖に對しても申譯ないことかと存じます。殊に主君は御出征中で信長の軍と戰つてをられますのに留守居の者が一矢も交へずに降服すると云ふことは出來得べきことでないと存じまする飽迄も敵を引受けて戰ひ叶はぬ時は城を枕に討死してこそまことに武門の譽れ御先祖の御名を辱かしめぬ事であらうと存じませう。まして勝負は勢の多少を以て定まるものでなく信長の軍敵多しと云へど柴田勝家の武勇如何にすぐれたりと云へど敢へて怖れるに足らぬ儀かと存じます」

奥方はどう〳〵と籠城說を主張した。

廣告

平館隣り
御料理 鰻蒲燒 仕出し
魚榮
電話四二四番

ちのくすり
御需めの方は
平白銀町 吉田新聞店へ
電話四十八

平町紺屋町
藤沼醫院
電話五〇七番

無盡は磐城
簡易の金融を望まるゝ方は
趣味の貯蓄を望まるゝ方は
堅實と誠意とを主義とする
當社を御利用願ひます
常磐線植田町本町
磐城無盡商會
同平町中町通り
平支店
目下五百圓會、會員募集中滿口にならぬうち早くお申込み下さい、當商會の事務取扱所は各地にありますから最寄り取扱所へお申込み願上ます。

公衆衛生に就て
傳染病流行の季節となりました、殊に各自御家庭の便所の不衛生は最も危險であります、警視廳防疫課奬勵に係る便所衛生器を御利用下さい、器具は無料で貸付し實費二十錢で申込次第即時取附いたします。
平町田町七十三番地
平鈴木組公衆衛生舍
電話五十八番

急告
一女中さん（十六七歳以上）一名
一看護婦見習 二名
右至急募集致シマス
磐城病院
平町田町通り
電話一一四

營業品目
絹糸、絹紡績
綿糸、染糸、組紐
漁網糸、人造絹糸
カタン糸、輸出用加工糸
眞綿、其他糸物一式
東京市日本橋區通油町
株式會社 藤掛商店
電話浪花三五一番
振替東京三三四〇番
糸界の羅針盤糸紐通報御一報次第直送

小店員募集
十五才以上十七八才迄 五名
小學校卒業程度御希望の方 磐城新聞社御出で下さい。委細面談

株式 諸株式の賣買に應じます
謹告
株式現物賣買
平町田町六八
駒場四郎商店
電話四六五番
電略（カネ）又ハ（コ）
（電話高價に買入れした）
取引は迅速を第一とします
取扱は親切を旨とします
賣買 土地賣買金融の中介をします

營業種目
內地材
材木各種、羽柄材各種
建築諸材請負
礦山用坑木其他諸材請負
外材部
米松、米杉、大角製材調達請負 其他
(百) 佐藤材木店
常磐線平町 新川町
電話三三五番

鐵筋コンクリート
鐵骨組立
和洋建築
文化式建築
設計監督
土木、建築、請負業
合資會社 丸三森川組
社長 大森鎮平
東京日本橋南茅場町二〇
電話茅場町(66)四五二二番

のんですぐきく
クノー散
神經痛、頭痛、ロイマチス、齒痛、肩のコリ、其他疼痛時服用すれば奏效的確なり
論より證據直ちに試みられよ
定價 二十錢、三十錢、五十錢、一圓
平町各藥店ニテ特約販賣致します

懇切迅速勉強は
弊店のモットーであります
磐城銀行御指定
ケーテー洋服店
平町材木町 高野幸一

血に狂つた爭議團員
警官隊を傷く
昨夜電燈線を切斷して 闇に仄めく日本刀や混棒
凄慘な臺の山の亂鬪

入山炭礦の爭議事件も漸次下火に傾きつゝあつた昨十五日午後入[illegible]柄入坑すべき三番[illegible]百四十七名が入坑せんとするや爭議團員約廿五名は之れ等坑夫の入坑を阻[illegible]八仙、臺之山附近に[illegible]同所を警戒中の會社[illegible]數名と衝突し

遂に流血の阿修羅場を現出するに至り更らに狂亂の爭議團は警戒中なりし平署宇[illegible]榮三郎巡査左側顔面から頭部にかけて長さ四寸深一寸餘の裂傷を負へ其の場に混倒しめ、急を聽いて急行した平署近藤警部補以下警官隊六十餘名は爭議團員廿五名を檢束せんとしたが此の頃より現場に現れたる闘家博、高橋長太郎外爭議團員百數十名は

前記暴行者の檢束を防害せんとして此處に端しなくも警官隊と衝突を始めるや折柄何者かの手に依つて電燈線が斷たれたため現場附近は全く暗黒化し狂暴限りなき爭議國は手に〳〵日本刀、斧、薪割、槍、混棒其の他の巨器を以て暗黒の中に警官隊と大亂鬪を開始し警官隊を指揮する近藤警部補の

後頭部を混棒をもつて毆打長さ一寸餘の裂傷を負せた外郡山署より來援中の岡部警部補の左手を捻じ挫き、平署渡邊泰治部長の背部、菊地明七巡査の左手大腿部其の他に打撲傷を負せ凱歌を奏して午後九時爭議團本部に引上げた

闘家、高橋以下の爭議團全部檢束
傷ついた警官を入山病院に收容

近藤、岡部兩警部補外三名の警官は狂暴の爭議團員のために重傷を負はされ直ちに入山病院に昇ぎ込み應急手當を受けた、宇南山巡査に餘病の併發せざる限り生命は取止めるらしいが

近藤警部補は全治約二週間、菊地巡査は全治十日、岡部警部補、渡邊部長は全治約一週間を要する見込であるが暴動最初に見舞はれた入山會社警務係員佐々木清は重傷其の他馬目自治會長以下鈴木知造、尾形宇之吉、鈴木安吉、柴田仲三郎、小菅半一郎、遠藤政之助、阿部清助、太田七郎の自治會員は各れも重輕傷を受け入山病院に收容した而して此の狂暴の限りをつくし

凱歌を奏して本部に引上げた暴動團員百數十名は直ちに警官隊のため同本部を包圍され逃亡した數十名を除き爭議團幹部闘家博、高橋長太郎、田中利勝、田村勝美、廣瀬貞を始め九拾七名は一網打盡に檢束され平署武道場に收容目下嚴重取調中であるが大亂鬪の現場八仙。臺之山附近に散亂してあつたほか爭議團本部にあつた

暴動の際使用せる日本刀、手槍、斧、薪割其の他の巨器百數拾は平署階上の一室に堆高く積まれ當時の凄慘事を物語つてゐるなほ逃亡した暴動爭議團員數十名は今十六日正午頃から全部追跡檢束に努力してゐる

濱通りの各署長 取調べに來援
小泉檢事の指揮で
暴徒續々と收監

爭議團員は遂に警官數名に重傷を負せた不祥事を惹起するに至たり闘家、高橋以下の爭議團幹部を始め九十七名が檢束されたことは別項の如くであるが闇黒の中の大亂闘に依爭議團員中に七名も頭部其の他に重傷を負つた、急を聽いて急據來援した水谷四倉署長、渡邊浪江署長、大久保富岡の濱通各署長は平署小熊、片寄兩司法主任と共力暴徒九拾七名を今十六日午前九時から取調を開始し中檢事局小泉檢事は午前拾一時平署に至り前記各署長及司法主任を指揮した上取調濟の爭議團員を片端から刑務所に收容することとなつた

狂つた放火犯
平署で取調中

石城郡玉川村大字金成字若宮羅字のすげ換業吉田重太郎(四三)は十三日午後四時同村某家の物置に放火し逃走せんとしたのを同村駐在眞弓巡査に逮捕され本署に引致取調を受けてゐるが同人は多少精神に異狀を呈してゐるらしいと

寧ろ自滅を覺悟した坑夫組合が豫定の行動
藁屑やヌカを米俵に入れて 爭議團員を吊つた卑劣な手段
入山爭議遂ひに大團圓

未曾有の暴動を惹起するに至つた最大誘因の三番方入坑坑夫百四十七名は十五日午後五時まで大亂鬪を他所目に各れも入坑作業を開始し今十六日一番方の入坑者も百八十八名で會社側の勢力益々旺盛となり此の大暴動を最高調にさしもの入山炭礦爭議事件も

大團圓を告げる模樣である、爭議團は最高幹部を始め根こそぎ百名の檢束者を出だしたため十五日午後九時まで赤旗を掲げてあつた爭議團本部は昨夜午後九時以後戸をとざして全く閉鎖するに至つたが現場及爭議團本部を臨檢した樫村署長一行は爭議團本部に積上げられあつた米俵を調查した結果米俵の中は米一粒もなく何れも藁切れが一杯に詰込んである事が發見された事件には何等の關係はないが今更の樣に爭議團幹部の卑劣さに驚かされるものがある、而して爭議團が此の狂暴の最大を盡したことは既に

戰鬪力を失ひ何等か大義名文を立て爭議を中止したい希望にあつたが入山會社は益々態度强硬にして倒底仲裁等の可能なく、されぱとてそ儘立ち消いになる事は面目上忍び得ざる絶對絶命の窮地に陷つたので遂に苦肉の策を弄し自ら死地に入つたもので寧ろ坑夫組合が豫定の行動と觀られてゐるが、此の大動亂を最後に入山爭議も全く鎮靜するものと見られてゐる

新舞子應援
伊東氏の篤志 本社を通じて

平町伊東一氏は目下長野縣松本市に勸業博覧會を開催出張中であるが目下地元大浦、草野村並に四倉、平町等が躍起運動中である新舞子を東京日日新聞社の募集してゐる日本新八景中へ當選せしむるの擧を讃し本社を通じて葉書一千板を送致して來た

松葉の精蜜

平町字柳町山崎喜正氏は數年前から持病のゼンソク療養のため種々研究の結果マツ葉の精が最も效果ある事を體驗し遂に松葉密に依つて多年煩んでゐたゼンソクが快愉するに至つたので廣く同病に煩む人のために此の松葉密を紹介してゐるが此の松葉密はゼンソク以外の萬病にも特効あるものであると

磐女旅行通信

(第一信)

新綠のさわやかな色におほはれた春の野を賞でながら、いつか私達ちは大帝都の空の下の人となりました、物珍らしい都に瞳をひらきつゝ、帝室博物館、國典其の他を見て今やつと丸ビルで樂しい食事も終ひました、不夜城とか云ふ都の夜の街を私達はこれから見物に出掛けます、元氣旺盛な一同の爲めどふぞ祝福してやつて下さる事をお祈り[illegible]ます

(第二信)鳥羽、奈良

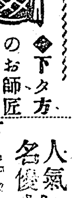
二見の旅舍で連日の疲れを癒やし元氣を恢復して午前八時半鳥羽行きの列車に乘り込みました、窓越しに見る水郷の美しさに驚歎、瞳を輝かしたのも束の間鳥羽驛に着き、それから日和山に登り相樸灘の風光を眺めて私達ちは思はず讃美の聲を洩らしました、十時五十分鳥羽を發し二時五十分奈良驛着驛前與田屋旅館に小憩して開花天皇の御陵を拜し更らに昔聖武天皇に任いた采女が帝の寵愛の薄らいだのを嘆き着てゐた衣を池畔の柳にかけて投身したと云ふ悲憐な古事を物語る猿澤の池を見ました、衣掛けの柳が池の水面を吹き渡るかすかな風に力なくふるいながら淋しげに面を伏せてゐた(つゞく)

(第三信)

それから一行は春日神社に詣でました、朱塗りのた宮や大廊等がとても美しいものでした、東大寺最古の建築物である三月堂には觀世音菩薩や、二王、四天王寺等天平時代の彫刻物が今尙保存されてありました、若草山の美しかつたこと、可愛い鹿が人なつこい眼を見張つて食物を乞ふては皆々を喜ばせました、次に有名な東大寺大佛殿に行き先生の說明して下さる大佛樣の寸法と眼で見た實物とを合せて「そんなにあるんだろうか」と驚きながらも矢張り「大きいなあ」と思ひました建築物を見ても彫刻物を見ても奈良朝時代の豪盛振りが偲ばれました、正倉院はただ外から緣の木立隱れに、その大屋根を拜したのみでした、興福寺に詣で漸く今日の見學も終へて遠い昔の奈良市を偲び乍ら宿へ歸る頃は、もう町にも街かついてあたりには宵の涼しい風が快よくそよいで居りました

磐女關西旅行團

磐城新聞社御中



◆下タ方のお師匠さんから笛の稽古をつけて貰つて、其の成績やがて成業の見込ありとの折紙をつけられた玉川の喜代治、笛の稽古はホントウに命がけよ、妾、アレからお尻の穴が痒く夫れが段々痛み出してトウ〳〵痔になつてしまつたのデモ折角だから覺ゐるまで我慢してやるのよ、だつてまア前でなく裏家の方だから仕合せといふもの◆本店の便所へ入つて不作法に赤旗をヒン捲くると、アヽラ怪しや下半身裸體の怪物が眼前に現はれた、ビツクリ驚いて突ツ立つと忽ち自分の姿に變つた、これは富美乃家の雪佳詐はりない告白だが傍に居た君丸、ワシもネハ、初めて入つた時ビツクリしてネハ、あんまり格好のわるいのに氣が咎めてネハ、ひとりで兩足がちゞこまつてネハ。

新進の洋畫家
大森畫伯後援會
知名の有志を網羅して
平町に作品頒布

白井遠平翁の令孫である新進の洋畫家大森義夫氏は東京美術學校在學中より頭拔けた才能を發揮し二十三歳にして「三味線持てるボーズ」を帝展に出品して堂々大家の間に伍して見事入選したのを始め「文子と人形」「人物」その他異色の力作を出品入選した如き他の追從を許さぬ氏の技倆は世に既に定評ある處であるが、今回平町に於て左記の諸氏發起となり同氏の作品を廣く頒布すべく、後援會を組織する事になつた因に頒布畫は甲種百圓、乙種七十圓であつて希望者は平町字田中、山田盤磨方事務所宛申込まれ度いとの事であるが趣意書並に發起人賛助員氏名左の如し

大森義夫氏後援畫會趣意書

新進の洋畫家大森義夫氏は白井遠平翁の令孫にして端睨すべからざる天稟獨自の畫才を有し東京美術學校在學中夙に出藍の譽あり現に内外畫壇の精粹を萃めたる母校の所藏品中、氏在學中の處女作亦その一に加へられたるが如き如何に氏の畫才が煥發燦爛として縱横無礙なるものあるから窺知するに足るべし而も所謂陳套藝術の機構に對する不滿とその創造に對する希求より在學中弱冠廿三歳既に力作「三味線持てる女のボーヅ」を帝國美術院展覧會に出し堂々諸大家の間に伍して見事入選したるが如き脱俗超凡他の追隨をゆるさゞる氏の技倆は今や渾然として漸く神韵縹渺の域に入りつ後の大成蓋し既定の事實ならずんばあらず、吾人茲に這箇の新進畫家を得たる事を以て心中些か郷黨の衿誇とし敢て氏の爲に畫會を催しその芳烈なる新興藝術の香に接せんす乞ふ奮て御賛助あらんことを

(發起人イロハ順)井上貞治郎　石川友次郎　蓮沼龍輔　小野庄一　加藤丈夫　加藤新　柏木哲　仲里文平　草野派平　山崎清三　山田盤磨　松本德一　阿部政右衛門　新田目春松　木村守衛　三森虎雄　四家又一　柴田德二　諸橋守次　關内正一

△賛助員(イロハ順)江尻博孝　江口忠一　伊藤淺之助　遠藤俊一郎　猪狩庄平　濱崎善三郎　荻原申八　長谷川平八　長谷川浩太郎　新妻盛　堀部留造　本馬武　戸田兵藏　千葉彥治　小野晉平　小田吉治　織田豐太郎　大峯庫　金成通　柏原幸次郎　川崎文治　吉田宗雄　吉田正雄　高岡唯一郎　鷹崎貞衛　武田精一　高久忠　高橋龜松　永山德一　永山和平　中野甲藏　中野康平　植竹源太郎　漆畑元吉　野崎滿藏　草野正啓　山崎吉平　山崎庫太郎　谷口長治　馬目太平　松崎松治　古川傳一　藤田榮助　小林誠次　國府田直良　安島重三郎　青沼鋒太郎　赤津庄兵衛　麻生川顯　安島久　櫻井賢文　板本隆藏　佐藤武之　佐藤作平　酒井淸　木田織江　木村清次　桐谷文平　木村進一　湊谷定次郎　宮田三郎　白石長平　唐土齊治　諸橋元三郎　清水廣政　鈴木辰三郎　鈴木邦三郎(以上)

本屋に一足お先き 電信室を獨立
既に敷地も決定して
平驛の急速な膨張

常磐線磐越東線の分岐點として日々數千の旅客の乘降する平驛本屋の改築問題は前年度に豫算書並びに設計書等關係書類は本省に提出査定中であつたが、會計年度の變つたゝめまたゞ流れとなり關係書類の

再提出さなり海とも山とも定まらない狀態となつた同驛電信室は現在の信係務のじん速正確を妨げる事甚だしくまた交換手電信係合して廿名近くの人數では狹いを告げるので電信室改築問題が緊急事とされ、同驛でも豫算約四千圓を計上本省に認可指令の申請中である、これは見込みがある樣で指令の認可次第着工遲くとも九月初旬には落成を見たいといつてゐる

新築電信室は雜音防止に細密なる考慮を拂つて内部構造を全部キルク造りとし現在の幻映線を改めて二重通信器になし事務の簡じようを計るはずで敷地は約十五坪平家建でホームに添ふた住吉屋支店横の空地と大体決定してゐる

時言

坑夫組合、警官隊を傷けて根こそぎ檢束さる、何のことはない、職業爭議屋と云ふ稀代の誘拐魔が

□

絶對絶命の淺間の噴火口から無汚な乙女の足をさらつて、無理心中と云ふ當然の地獄の底へ落ちたまでの事だ

□

坑夫組合もたいてい年貢の納めどきだ、所詮は横死も止むを得まいが、まきぞいを食ふ坑夫が可哀そうでならない

東堂山の住職 今朝殺害さる
小野新町署大活動
犯人未だ捕はれず

田村郡小野新町名刹東堂山滿福寺住職にして同町專光寺住職を兼ねる地方に於ける名僧として知られた田村硯光(三七)師が今十六日朝未明何者にか前記滿福寺に於いて殺害された事件あり届出に依つて小野新町署は犯人逮捕に全力を擧げてゐるが午後二時までは逮捕されぬ(小野新町特電)

下町情話

紙人形春の囁き

人氣名優 梅村蓉子 一生一代人神の傑作　岡田時彦 山本嘉一 助演

◎◎見よ 眞に偽りなき優秀映畫 陸の人魚を凌ぐ大名篇 (拾九日より公開)

原作…田中榮三　監督…溝口健二　(全十三巻)

全日本憧れのスター 梅村蓉子の爲めに大日活が巨萬の費を投じて完成せる映畫

平館

登録商標

釀造元

福島縣平町 山崎合名會社

電話 營業部一〇番 釀造工場二七番　振替東京一九七五五番

東京支店 上野車坂町四三　電話下谷五七二二番　振替東京六八三二二番

齒科口腔一般

診療時間 (午前七時ヨリ午後八時マデ) 但シ急患ハ此限リニアラズ

平町南町成田山前

鈴木齒科醫院

齒科醫 鈴木五郎

釀造元 清世界

石城小名濱町 清水屋

銘酒 各炭鑛御用達

小野晉平 電話六番

内科、小兒科 花柳病科 入院應需

藤沼醫院

平町紺屋町 電話平局五〇七番